

あ・うん

金剛禅総本山少林寺広報誌

vol.
18

2011 長月・神無月

僧階補任講習

初生の赤子として心を磨く一日
布教者の使命と自覚を新たに



2011年7月17日 僧階補任講習(中導師・大導師)

5:30

朝の清澄な空気は、何か新しいことが始まる予感をさせます。



6:00 作務

集合、諸連絡後、早速作務から。ただ拭くのではなく、磨き上げるつもりで取り組みます。作務を通して、自分自身と向き合い、修行者としての初心に帰ります。



感謝、頂きます



6:30 朝食

金剛禅門信徒の修行法の中にもある「食養」。食物(いのち)を感謝の気持ちで頂きます。



7:10 実習Ⅰ「鎮魂行」

講師は田村明宗務局長。主座・打棒の所作を確認後、実際に、主座・打棒を務めてみます。本堂の祭壇の前で務める主座は、道院で行う鎮魂行とはまた違った緊張感を味わえます。

8:00 実習Ⅱ

「少林寺拳法修行法」

川端哲講師

「武としての少林寺拳法」であると同時に「行としての少林寺拳法」でもあることを実感します。



本山では、中導師および大導師補任講習が年に2回、少法師補任講習が年1回、行われていきます。この講習は、金剛禅の教えをより深く学び、各地、各道院において実践活動を積むといった、ある一定の条件が満たされて初めて受講することができます。「行」としての少林寺拳法の指導者であることはもちろんのこと、人づくりの根幹である教えを説き、法を伝える金剛禅布教者として、人を導く方法を具体的に学びます。特集では、まだまだ知られていない僧階補任講習の一日をお伝えします。金剛禅の奥深さを体感できるこの講習に、次はあなたも参加しませんか。

初生の赤子として心を磨く一日 布教者の使命と自覚を新たに

受講者の感想より

▼早朝の作務から始まり、鎮魂行・易筋行と進むスケジュールは、学生時代の初心に帰ったようで、身の引き締まる思いで講習会がスタートしました。指導者論も法話も儀式要領も、日々の指導や修行に気づきと役立つところが多く実のあるものでした。法座は初めての経験、道院でも機会があれば開催しようと思います。▼ここに至る道のりは、誰もが等しく相應の勉強を経ての参加です。仕事や学業多忙の中、それぞれが自ら発願して刻んできた道のりに、同志的共有感覚が芽生え、仲間意識の強い受講となりました。プログラムに沿って進む内容は、金剛禅の本質を

担当/山下真由美

9:25 講義Ⅰ 中導師「指導者論」松本好史講師、大導師「金剛禪の布教について」東山忠裕講師

10:25 講義Ⅱ 中導師「教学原論」川端哲講師、実習Ⅲ 大導師「法話演習」須田剛講師

「毎回新たな準備と新鮮な気持ちで臨んでいます」という講師陣。指導者自身も修行者であることを感じさせます。練られた内容の講義は、受講者をぐいぐいと引き付けていました。



11:15 ~昼食~

午後は浦田武尚代表の激励の言葉から始まりました。「心の指導者として、皆さんのますますの布教・普及活動に期待します」



感動を与える儀式行事
を目指し



12:10 法座 今井健講師
法座とは、参加者同士が話し合いながら互いに教化し合うことです。

13:05 実習Ⅲ、Ⅳ
「儀式要領」田村明局長

実際に達磨祭の儀式要領にのっとり、導師を務めます。導師の所作は、その一つ一つが儀式の雰囲気左右します。



14:30 僧階辞令授与式・閉講式

大導師に9人、中導師に4人が新たに補任されました。聴講生7人を含め20人が参加した今講習。金剛禪の教えが身心に染み入る、内容の濃い充実した一日となりました。

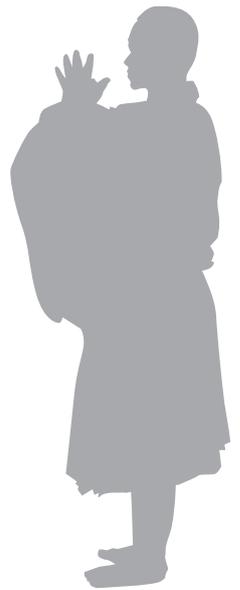


改めて学び、そして自分の原点を振り返ることのできるものでした。特に、法話演習においては、短時間の間に興味をそそり、自分の思いと教義を簡潔にわかりやすく伝えることの難しさと面白さを再発見することができました。

▼少林寺拳法のことをより深く、より正しく知りたい、これが私が僧階補任を志した率直な理由でした。日ごろの道院での修練とはまた違った緊張感が背筋を正してくれ、とても新鮮な気持ちで臨むことができました。9時間に及ぶ盛りだくさんの内容でありましたが、ひとときも気の緩むことのない充実したものでした。この講習で得られた刺激と緊張感は講習を終え帰宅した後も当分残り、寢床に入ったその夜も講師の先生方や受講生の表情が何度も思い出され、すぐに眠りにつけなかったほどでした。

▼達磨祭法要の実習では、僧階補任講習で大導師を補任される道院長の先生のレベルの高さを思い知らされると同時に、私も権大導師補任を目指すとともに、6年後はまた僧階補任講習を受講し、本日、大導師になられた道院長の先生方を目指し努力したいと強く思いました。

「僧階」って



文／宗務部

ここでは、今徐々に普及しつつある「僧階制度」についてご紹介します。「僧階」をもっと身近に感じ、そして共に学びましょう！

1. 僧階の目的は？

僧階は、金剛禅を正しく伝道し、また「行」としての少林寺拳法を正しく指導していくことを目的に、金剛禅総本山少林寺に定められた布教者の資格で、金剛禅師家しげによって補任されます。道院内での僧階の有資格者は、道院長を補佐し、道院長とともに門信徒を教化育成するリーダー的な存在として、今後の活躍が期待されています。

2. 法階と僧階との違いは？

少林寺拳法には武階、法階そして僧階という三つの階級制度がありますが、特に法階と僧階には次のような相違点があります。

法階は金剛禅修行法による自分自身の修養度と、教えの実践度を表す

階級ですが、僧階は教えを人に伝える人を育てていくための、指導性に重きを置いた資格です。

それは、法階では考試に合格すると師家に「いんか許可（＝認めること）」を受けますが、僧階では審査に合格すると師家に「補任（＝役職に任命すること）」を受けること、また「人を正し
い道に導く師」と書いて、資格の称号を「導師」と称していることから、階級の性質そのものが異なります。

3. 履修の中身は？

僧籍に編入すると、初めに少導師に補任されます。なお、現行では少拳士以上の法階を有していることが僧籍編入の条件となっています。

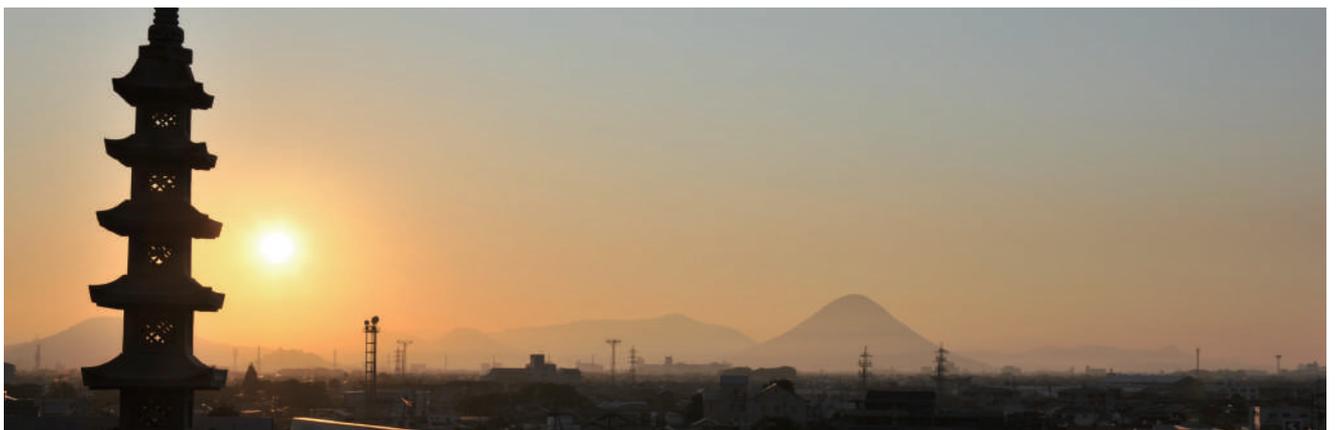
僧階では教学全般、布教の進め方、指導のあり方などに関する幅広い知識を『僧階教本』によって学び、定められた課題に関してレポートをまとめます。

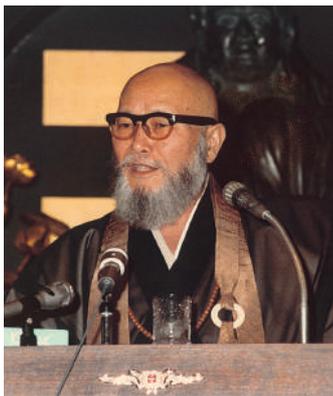
また教本で得た知識を適切に運用できるよう、道院でも法話を行ったり、入門式・新春法会などの儀式行事の運営に携わりながら経験を積むことで、導師としての実力をつけていくのです。

4. 人を育てる

現在、金剛禅教団には多くの指導者がいますが、組織として健全であるためにも、やはり指導者自身が慢心することなく、自己研鑽けんざんに努めることが大切です。更に、次世代の社会を担う新しい布教者（指導者）を育てていきたいものです。

そのための確かな道筋が金剛禅の僧階制度には必ずあります。





開祖語録 ダイジェスト

1975年12月 定例
(道院長会・武専講
義)の法話

誰それは大範士になった、俺はあいつより古い、俺のほうがエライと思うのに……というような不満を抱いている人もいたりするが、古いかからエライのではない。組織の中で、あるいは組織の中心に対して、自分がどれだけの貢献をし、どれだけのプラスになったか、反省してくれ。

例えば、古い人たちのなかに、七

段、八段になっていくけれども、弟子を道院長に育てた実績のない人もいます。弟子を育てられない。技はうまく自分だけが強い。自分だけで満足している。そういう人は、やはり指導者としては欠陥がある。技がうまくなるために努力してきた、そのことの価値はある。けれども、組

地域や組織に対する協力・貢献度

また、自分の周辺をよく考えてみなさい。これまでに何千、何万という人たちの顔を見、口をきいてきたはずである。そうした中で、本当に

だから弟子たちにプラスになることをどれだけやっているか、また上部機関に自分がどれだけ貢献しているか、これが考え方の基本なのである。

織にとつての価値も大きいかという

と、必ずしもそうではない。

地域で何か行事をやっても顔も出さない。むしろ反対をしたり、邪魔をしたりする人もおる。そういう人は、地域に対する協力・貢献度、ひいては組織に対する協力・貢献度ということでは減点になるわけである。

仲よくできる人を、君たちは何人持っているかな。何かあったときには真っ先に駆けつけてくれるような、そういう大事な人に自分は今まで何をしていたか。人間としてのつきあいが全然できない人もおる。

ここでいう修行は「拳禅一如の修行、力愛不二の思想」のことで、行

が修行には大事なのである。口数が多く自らの修行を怠れば、自らに厳しさがなくなる。それどころか他人には厳しい己が見つかる。自ら率先して稽古に励むのが道筋で、単に技の練習のみに終わってはいないか、

前回「釈迦如来双跡霊相図」で足跡を追っているか否かを問うた。毎回の鎮魂行で唱和する教典、そこには我々の目指すべき目的地と、そこに向かう道筋と、そのための実践要領が具体的かつ明瞭に示されている。言行一致が本分の我々、振り返って自らと照らし合わせてみると自と結論が出る。

念一致は「信念と行動の絶対両立」のことである。自らに厳しくすること

間がある。「自らを律すること」。これが修行の始まりではなからうか。

清風

vol.18 宗務局長 田村 明

身を律する

自我を修め、靈性を養い、 人らしく生きるために行ずる

「先生は靈魂の存在を認めますか？」と修練

後の話の中で聞いた。先生は幽霊に出会った

ことも、臨死に際して幽体離脱を経験したこ

ともないので、「わからない」と答えた。「靈

や「魂」を、肉体から離れて存在する精神的実

体とするならば、その問いは極楽や天国の有

無を問うのと同様に、あると思う人にはある

のであろうが、科学的に証明不能な問いであ

り、肉体の死とともに「わたし」もなくなる、

つまり「わたし」として「わたしの死」はない

と考えるならば、刺さった矢を抜き、いかに

生きるかが優先する。己の願望に目をくらま

すことのない知恵を身につけ、我欲を抑え、

「靈性である魂を修め」、人らしく生き抜くよ

うに修行することに意義がある。

「魂」に比較して、「靈性」という言葉は、な

じみが薄い。英語の「spirituality」の日本語訳

が「靈性」であることから、「心靈」と類似の意

味とし、靈魂などの超自然的な存在を信じる

ことや、あるいはそれらとの結びつきを感じる

ことができることに意義を置く考えととら

える場合もあるだろうが、おおむね「人間や

動物の体に宿って、心の働きをつかさどり、

尊く目に見えない不思議な働き」と解してお
けばよいように思う。

日本の禅を世界に広めた人の代表でもある

鈴木大拙は、精神と物質との奥にあり、この

二つを一如いちじよとなすものが靈性であるという。

精神には倫理性があり、靈性はそれを超越し

ているとする。「我々の心のもと、心の働き

の出どころ、我々の存在の根底をなし、知情

意を働かせる原理(を)靈性と呼ぶ……だが

靈性という実体が、別個にあるのではない、

我々の心の最も奥深いところにあるもの、

即ち心の本体に、仮に靈性という名を付し

た……」と述べている。

「靈性」を「宇宙の中の命の自覚」ととらえ、

人間のみならずさまざまな存在に靈性はある

と考える人もいる。大乘仏教あるいは禅宗に

おける「一切衆生悉有仏性」と類似する見方

で、「靈性」に「個別の宗教性を越えて、宗教

の共通の基盤を見出していこうとする、超宗

教性や通宗教性を求めようとする衝動があ

る」とする。

また、私たちが経験する現実という世界

は、現実の表層にすぎず多層構造であり、人

間の意識も多層構造である。浅い表層意識で

は現実の浅い表面のみ見え、意識の深層には

現実の深層が見える。また、意識が表層から

深層へと変化していく過程において「方法的

組織的な修行」(井筒俊彦)が必要であるとい

う考えや、その考えの意義を認めつつ「深い

意識の層における体験を持った人が、必ずし

も表層のレベルの問題解決に役立つともかぎ

らない」(河合隼雄)という指摘もある。

私たちにとって、人間の靈性とは学歴や出

身、性別、人種に関係なく、己の欲を抑え

て、他者に慈悲を持って行動する人の中に見

出すことができるものであり、己も修行に

よってそうなりえると信じる根拠でもある。

「凡そ人心は、即ち神なり仏なり、神仏即ち

靈なり」というのが私たちの考えでもあるが、

「人間の『靈性』とは何か、どう考えるかを問

うことは、少林寺拳法の修行目的を問うこと

であり、人間性(慈悲心と行動力)を高めるこ

とができる信の有無を問うことでもあるよう

に思う。



道

津田
武高

時代の变化と組織改革

岐阜御嵩道院 増田計義道院長

開祖が志を立て金剛禪教団を設立し64年の時を迎えようとしている。紛れもない唯一無二の教団と成り、道はできた。ダーヴィンは言う。「時代に最も適応できる生き物が生き残る」。今回の改革は正に生き残りを賭けた改革である。それは時代の変化であり、社会の変化への対応である。教団組織の使命、責任として社会の変化に対応していく必要がある、変えてはならない部分と変えなければならない部分に分かれる。唯一無二の教団として、未来に向かって社会に必要とされ役に立つ組織としてあり続けるためには、守らなければならない過去と捨てなければならない過去がある。組織を形成している我々指導者も改革の根幹を正しく理解し、開祖が組織を創始されたときの志を知り、原点に帰ることを改革の初めとしなければならないと考える。

経営学者のP・F・ドラッカーが改革の要点について次のように解説している。「組織には二つの基本的な機能が存在する。すなわちマーケティングとイノベーションである。多くの組織が創造性を抑制しているが、新しいことに挑戦するための実験的な取り組みへの意欲は非常に重要で、脅威ではなく機会だ」という意識を組織全体に浸透させるべきであ

る。体系的なイノベーションと改善とは、変化に向けての明確な組織的探究であり、イノベーションにつながる可能性のある機会の体系的分析をし、機会に関するキーワードは、変化の探究と変化に向けての体制づくり、更に変化を生かす努力である」。この解説において注目される点は、変化は脅威ではなく機会であると考えるところである。機会とはチャンスであり生かす努力が必要なのだ。

我々は易筋行である少林寺拳法を通じて、さまざまな変化に対し臨機応変に対処する技術を身につけている。おのずと、時代の変化にも自分が変わっていかなければならない。そのとき輝くものを自分自身でつかまなければならない。次の時代を造るとき、捨てる勇氣が必要であり、新しい物を得るためには、過去と経験を捨てることもまた必要である。人と人が勘と感性で触れ合い^ぶぶれることは、苦しいことも楽しいことも含めて、素敵なことであろう。面白がれることに挑戦し、互いの気持ちをも一つにして行動し、生きていくことの楽しさを感じ、世の中が自分を必要とするのと、必要とされる自分が自分自身の存在価値であり、また、世間に認知していただくことが存在の真の価値なのである。後で熱くなる

のではなく我々が共有する理念、思想で昂ぶり熱くなり踏み出すことが大事だと考える。

もう一つのキーワードがマーケティングである。この市場性は時代とともに多様な変化をしており、少子高齢化、経済的破綻(リーマンショック)、そして3月11日に発生した自然エネルギーの変化、東日本大震災、特にこの震災においては多くの尊い命が奪われ、積み重ねてきた財産が海に飲まれ、人生観そのものが変わる災害に見舞われた。市場性については、刻一刻とさまざまな変化をするため、特に状況分析と市場ニーズの分析、また過去のデータとの比較、世の中が求める要素研究が必要となる。

金剛禪教団は独自性を持った唯一無二の組織であり創始から変わらぬ教義を持ち、少林寺拳法という独自の技法を持った武道団体、また学校法人を持つ社会教育団体として、広く社会の役に立てる組織でなければならぬ。根底に調和の思想と人づくりによる国づくりを理念に理想境建設を目指す組織として、真に世間に必要とされるために、我々指導者が人の霊止たる我を認識し、自分の可能性を信じ、組織改革の意義を理解し行動すべきときが正に今なのである。

ダイジェスト



志をつなぐ

vol.3

おおや あきお 98期生
大屋 昭夫 大導師大範士八段

「半ばは自己の幸せを 半ばは他人の幸せを」という思いやりと感謝、この二つがきちんとできたら、それでよいと思います。人生にはいろいろなことがあります。本当にお陰さまで成り立っているのだと感謝するばかりです。自分が何かやってあげているなんてとんでもない話。よく考えてみると、いろんな人の支えで生きているわけですから。

自他共楽の教えどおり、思いやりと感謝で広がる人間関係

布教でも、一人が一人を連れてきたらすぐに倍になると思います。自分だけがやっていけばいいではなくて、こんなにもいいものだからやるうよと。そのときに、この人が言うのだから間違いない、と思ってもらえるよう、日ごろから信頼関係を築いていることが大切だと思います

※プロフィールや開祖の思い出など、金剛禅オフィシャルサイトの全文もぜひご覧ください。

▼1967年、米沢大会後、駅のホームにて



▲東京道院前で故・内山滋東京道院道院長を囲んで

ダイジェスト



道院長 元気の素

vol.3

加古川米田道院 道院長 村田 素彦 (35歳)

——道院長になって出会った感動のエピソードをお聞かせください。
見学者が来られたときのこと、何も指示していないのに、高学年の拳士が見学者用の椅子を並べてくれました。少年部に「自分で考えて行動しよう(主体性)」「気配りをしよう」と指導していますが、そのことをきちんととらえて行動してくれたんだと感じとても嬉しかったです。一人

よりよい人間関係からエネルギーが生まれる 身近なところから創る小さな理想境

が動きだすと他の後輩拳士も別の場面と同じように自ら動いてくれて、よい流れができていきます。
よくいわれるように、私は自分の身近なところで小さな理想境を創るという気持ちで運営を始めました。まずはこの身近な環境を変えていくことが大切だと感じています。
※プロフィールなど、金剛禅オフィシャルサイトの全文もぜひご覧ください。



名東道院

仲間と祝う 40周年記念大会

5月15日、ホテル・ルプラ王山で名東道院40周年記念大会を行いました。

記念大会の第一部は名古屋森孝道院との合同演武会でした。胸を着けた拳士による奉納演武に始まり、小中学生の演武、コミカルな寸劇を交えたアトラクション、運用法など、来賓や保護者の見守る中、多彩な内容の演武会となりました。そして、その様子は中日新聞の取材を受け、カラー写真付きの記事として掲載されました。

第二部は記念パーティーでした。速水信之道院長の挨拶、来

講習会1次

「原理原則」を掘り下げる

7月16日、17日の2日間、本山で講習会1次が開催された。本講習会では「原理原則」をテーマに掲げ、技術修練、講義、討議を織り交ぜながら、原理原則は技法のみならず、日常の場にも生かすことができる

賓の方々の祝辞に続き、名東道院の40年を映像で振り返る「思い出のDVD」上映がありました。続いて、ゲストとしてお招きした津軽三味線の演奏と、拳士を中心メンバーとした「おやぢバンド」の猛演奏で、立食パーティーの会場は大いに盛り



いう趣旨の下実施した。

技術修練では単に個々の法形を学ぶのではなく、各法形に共通する体の使い方や技の成立条件を明らかにすることで、技法に対する理解度や修得度を深めていけるよう進めた。

また、浦田武尚代表の講義や田村明宗務局長の僧階講義では、実生活においても存在する原理原則を日常生活や人と人と

上がりました。最後に速水道院長にお礼と感謝の花束と記念品を贈呈して、記念大会を終了しました。OB拳士もたくさんさんの顔を見せてくれて、楽しい一日となりました。(高田廣司)

洛東道院

元気を被災地に発信する

5月22日、京都市武道センター内の旧武徳殿で、「東日本大震災復興支援 少林寺拳法公開演武 洛東2011」が執り行われました。

毎年、日ごろの成果を発表し、少林寺拳法を布教するため、46年前より続いています。今回は、東日本大震災の発生を受けて、少林寺拳法を通して元



気を被災地に発信する趣旨での開催となりました。

プログラムは、基本演練、少年団・中高生・一般とそれぞれの団体演武のほか、法形紹介や優秀弁論発表と続き、最後に全員で100本突きを行いました。武徳殿に響き渡る拳士の気合が、ご来場の方々にも届き、会場全体が一つとなりました。震災復興に向けて、これからも金剛禅運動を継続・展開してまいります。(西謙造)

能登七尾道院

宗道臣デー… 義援金と美化活動

6月12日朝9時より、七尾市武道館で第7回七尾市民体育大会少林寺拳法競技が行われました。午前中に大会は終了しまし



たが、その後に能登七尾道院の宗道臣デーの活動を行いました。一つ目は、東日本大震災の援助金を集めるために、一突きに対して1円の寄付をお願いして、拳士一人1000本突きに挑戦しました。最後まで全員で頑張り抜き、終わった後は、汗びっしょりになりました。合計で1万5000円の援助金が集まり、少林寺拳法グループの義援金に募金することになりました。

その後、七尾市武道館、七尾市総合体育館周辺の美化活動(ゴミ拾い)を行いました。例年のようにタバコの吸い殻がたくさん、集まりました。しかし、例年なら空き缶もたくさん集まるのですが、今年はほとんど落ちていませんでした。(織平秀二)

僧階昇任者

大導師

■2011年7月17日付
太田 孝一(下高井戸南道院)
阪井 聡司(西船橋道院)
伊藤 浩司(仙台中野柴道院)
山下 研治(愛知浄水道院)
辻本 一榮(八尾高美道院)
平井 慎司(愛知朝日道院)
石塚 英樹(つくばみなみ道院)

中西 宏彰(和歌山宮道院)
勝又 直人(広島八丁堀道院)

中導師

■2011年7月17日付
中山 貴文(佐賀中部道院)
大内 邦浩(下高井戸南道院)
岡尾 浩二(松山武南道院)
五島 雅樹(柏原旭ヶ丘道院)

2011年6月度 認証

●新設

佐賀白石道院 梶原 俊一郎

お布施

▷郡山みほた道院 伊藤道院長 50,000円
▷山上万智子 故内山滋道院長 30,000円
息女
▷蔵本朝子 故蔵本清道院長夫人 20,000円
▷近藤典子 金一封
総本山少林寺改修基金
▷東京大塚道院 100,000円
▷鈴鹿中部道院 佐々木道院長 30,000円

法階昇格者

正範士

■2011年6月12日付
天内 司(青森藤崎道院)
関 英明(長野戸狩道院)
永井 奨武(東京千代田道院)
菅原 正則(HOYA)
辻上 健矢(瀬戸中日文化センター)
東仲 太郎(三田松聖高校)
伊藤 秀樹(防州スポーツ少年団)

山中 輝夫(奈良中央道院)
河原 章二(大和郡山南道院)
山口 豪紀(高松東道院)
濱寄 泰正(尾張瀬戸道院)
宮本 富博(生駒道院)
平井 敏夫(市川北道院)
今泉 忠俊(福岡三橋道院)
吉田 博美(奈良中央道院)
三井 栄三(大阪美原道院)

准範士

■2011年6月19日付
村田 昌治(近江八幡道院)
市原 昇(岐阜中央道院)
井上 晃(奈良富雄道院)
坂口 勝浩(大村西道院)
加藤 伸弘(木曾川道院)
■2011年6月26日付
深山 幸一(和歌山西脇道院)
安藤 清一(東大阪若江道院)
青山 継雄(遠江中道院)
高畑 一郎(倉敷郷内道院)
川崎 敏行(奈良中央道院)

■2011年6月12日付
中野 人忍(京都智恵光院道院)
三宅 耕三(西桑名道院)
大槻 敏朗(大和広陵道院)
藤田 竜太(我孫子道院)
真家 寛(常陸つくばね道院)
吉田 稔夫(熊谷西道院)
橋本 崇(埼玉上尾道院)
清水谷 正道(千葉美浜道院)
■2011年6月19日付
遠藤 聡(東京辰巳道院)

佐藤 靖宜(前橋橋道院)
杉浦 稔人(愛知知多道院)
藤岡 学(滋賀伊吹道院)
舟橋 弘晃(岡山大学)
宇津木 忠(岡山津島スポーツ少年団)
■2011年6月26日付
河田 良造(大阪富木道院)
小山 直樹(湘南誠志道院)
炬口 孝一(阪神百貨店)
藤井 三四郎(福山東道院)
池島 武彦(浜松北道院)
佐竹 浩志(小坂井道院)
岩浅 一男(荒川道院)
津野 涉(高知南街道院)
坂本 英信(広島八丁堀道院)
忠平 訓(埼玉藤久保道院)
佐藤 裕之(帯広南道院)
牟田 和弘(和泉黒鳥道院)
門林 洋勝(大阪富木道院)
北村 耕一(滋賀守山道院)

大槻 和弘(東京目黒道院)
掛谷 暢暁(福山東道院)
亀山 正裕(綾南道院)
鈴木 忠英(東京目黒道院)
加藤 伊織(浜松可美道院)
安道 亮(京都鴨川道院)
菱井 隆之(大阪市役所)
中川 繁(京都乙訓道院)
三好 克美(綾南道院)
丸山 雅裕(滋賀守山道院)
石山 晃一(滋賀守山道院)
土田 光雄(紫香楽道院)
松本 隆道(浅草蔵前道院)
飯野 貴嗣(本部道院)
山川 智博(大阪産業大学附属中学・高校)
小林 修(渋谷南道院)
中井 立(旭川北高校)
口村 淳(滋賀守山道院)
勝又 直人(広島八丁堀道院)

9月の本山行事 17日(土)~18日(日) 講習会2次
18日(日) 僧階補任講習(少法師)
25日(日) 帰山

10月の本山行事 9日(日) 達磨祭
23日(日) 認証式

講習会2次開催のお知らせ

テーマ「原理原則」

少林寺拳法の技には必ず「原理原則」があります。本講習会では、技法の原理原則を体感し、体得に向けて修練します。更に原理原則を日常生活にも生かしていくことを各種プログラムを通じて考えましょう。

日 時：9月17日(土)~18日(日)
1日目 8：45~18：00
2日目 8：30~15：00終了予定
会場：本山
対象：16歳以上で初段以上の現役拳士
申込方法：受講可能者には、詳細情報をメールでも案内しておりますのでご確認ください。
申込締切：9月4日(日)



編集後記▶前期僧階補任講習が7月17日早朝より開催された。金剛禅総本山少林寺の布教師として、基本的儀式、行事のあり方を再認識する。▶人と人の出会いから始まる社会において、必要不可欠な教化育成、済生利人を実践する指導者としての教養知識、面授面受の実務体験。▶金剛禅運動体の最前線に立ち、その布教実践が我々門信徒の「灯火」となるべく、理想境実現の牽引役を育てる場である。(あ)

表紙▶河合修 愛知県出身。日本を代表する写真家・藤井秀樹氏のアシスタントを経て独立。2009年5月より「ダーマ」をテーマに、『あ・うん』の表紙撮影に取り組む。ホームページは「写真家 河合修」で検索！名古屋千種道院、中拳士三段。

金剛禅総本山少林寺オフィシャルサイト▶

<http://www.shorinjikempo.or.jp/religious/index.html>
2週ごとに更新される代表メッセージをはじめ、「宗門の行としての少林寺拳法」を動画でご覧いただけるほか、誌面に掲載しきれなかった記事・写真も掲載されています。

金剛禅総本山少林寺 検索

あ・うん | vol. 18
金剛禅総本山少林寺広報誌 2011 長月・神無月

2011年9月1日発行(奇数月1日発行)

発行人：浦田武尚

発行所：金剛禅総本山少林寺

〒764-8511

香川県仲多度郡多度津町本通3-1-48

☎0877-33-1010

<http://www.shorinjikempo.or.jp>

編集人：秋吉好美

企画・編集：金剛禅総本山少林寺東京別院

〒170-0004

東京都豊島区北大塚2-17-5

☎03-5961-1400

e-mail aun@shorinjikempo.or.jp

印刷・製本：(株)ブル・ドック

※本誌の発行に掛かる費用には、SHORINJI KEMPO UNITY によるライセンス事業の収益金が活用されています。

広報誌「あ・うん」追加発送について ◆◆◆◆◆

現在、広報誌「あ・うん」を1道院につき10部ずつ(一般財団支部は1部ずつ)、毎号ご提供させていただきます。更に追加をご希望の方は本山宗務部にお申し出ください。(追加1部につき50円を承ります・送料別途要)

TEL.0877-33-1010

e-mail : fukyoka@shorinjikempo.or.jp

一期一笑



イラスト/大原由軌子

教育相談員 永井忠蔵

道院長の魔法のひと言

「エイ!」「おお!大した声が出るじゃないか」「ヤー!」「声もええが、動きもええぞ!」。不登校傾向の小中学生を受け入れている宇和島市こども支援教室に、濱田宏行宇和島道院道院長の少林寺拳法が月例教室メニューに加わっている。

この教室の常連として参加している中学生のA君。立派な体格をしているが、運動はどちらかというと苦手、また、人前で話したり、自分の気持ちを表したりすることもやや不得手でもある。最初は自分を持って余し気味で、少林寺拳法の基礎的な動きはおろか、筋トレの段階で小休止を要するといった調子であった。いつもなら、彼はここでリタイアしていたのかもしれないが……。

道院長の魔法はここから始まる。授業はいつも「説法」で始まる。説法を真剣に聞くA君を見て、「おお、その目はなかなか見込みがあるぞ!」。次に、予想以上の腹筋運動の回数をこなした姿に、「おお、やるやないか。普通やったらその回数は無理ぞ!」。基本技をこなした後には、「覚えが早い、これからは楽しみじゃ!」などなど。

大きな声がなかなか出なかったA君が、冒頭のように変わりつつあるのは濱田道院長の魔法のひと言、言いかえれば愛のひと言、その繰り返しのお陰と、心から感謝するばかりである。後日、A君の母親から、「ある晩、自宅でA男がそつと筋トレしていたんですよ」と聞きました。

投稿大募集 道場や拳士のちょっとした話を募集しています。※ペンネーム可ですが、必ず、名前、所属、連絡先もご記入ください。なお、原稿内容の整理・編集をさせていただく場合があります。原稿の選択はご一任ください。〒170-0004 東京都豊島区北大塚2-17-5 東京別院 広報誌担当宛
TEL.03-5961-1400 FAX.03-5961-1401 e-mail : aun@shorinjikempo.or.jp

宗門の行としての少林寺拳法



送小手を掛けようとしたときに、相手が我に対して背中を向けるなどして逃げようとした場合の変化技である。送小手から変化する刹那、相手の左脇に我の右体側を寄せ、相手の左肩から腕全体を我の懐に引き込みながら、我の脇の下で相手の上腕部をしっかりと挟み、肩、肘の遊びを取り、“巻のつくり”を作る。そのまま全身で梃子を効かせながら身を沈めると、相手の左肩が落ち、体勢が完全に崩れる。

撮影／近森千展 文／飯野貴嗣 演武者／守者：川島一浩 正範士七段 攻者：飯野貴嗣 准範士六段